

第9回日本人学生の「アジア体験」コンテスト to Vietnam 入賞者実施報告

昨年 8 月に実施した、第 9 回日本人学生の『アジア体験』コンテスト to Vietnam。今回、「夢・アジア体験賞」に入賞した 3 名（大学院生 1 名、大学生 2 名、）には入賞賞品として企画実現のための 30 万円が授与され、2009 年 3 月 31 日までに各自の企画を実現し、レポートを提出します。

入賞した学生が無事帰国し、それぞれの企画を実施、体験してきました。その報告書ができあがりましたので内容を一部抜粋して報告いたします。

なお、詳しい実施報告は当財団出版物「アジア文流 Vol.26」に掲載予定です。（7 月発行予定）

テーマ「ベトナムで体験したいこと」

林 浩之（慶應義塾大学 商学部）

企画テーマ：『金融市場の規制状況調査と外資系企業の進出によるベトナム経済の発展の可能性』

企画実施日：2008 年 8 月 20 日～30 日

今回の旅行ではいろいろな企業を訪問させていただきました。いずれもそれぞれ独自の視点からベトナムの経済、現地で取っている経営戦略、現地で経営を行うに当たって発生する問題点などを明確に語っていただきとてもためになるインタビューになりました。また現地調査には自分の大学の友人である根来を同行させインタビューの際のアシスタントをしてもらうことになり、とても効率よく行うことに成功しました。

上野 俊行（東京大学 大学院 総合文化研究科）

企画テーマ：『障害を持って生きるということ』

企画実施日：2009 年 3 月 11 日～21 日

私自身、両手足が不自由な車椅子生活者なのであるが、受傷当時は地方に住んでいたため学業を断念せざるを得なかった。しかしながら、現在は、都市に移住したことにより大学への進学が可能となった。ベトナム社会でも、障害者の社会復帰の可能性を広げてもらえればと思い、日本における自分自身の生活を紹介しながら、ベトナムの人々との触れ合いを求めてホーチミンを訪問した。

玉田 智子（広島大学 医学部）

企画テーマ：『私の 30 万円の使い道—ベトナムの子供たちのために未来へつづく支援を—』

企画実施日：2009 年 2 月 22 日～3 月 8 日

今回の渡航目的は大きく 3 つありました。

第一に、ベトナムの枯葉剤被害と補償制度について調べる。第二に、ベトナム人医師の方々と農村部での健康診断に参加すること。第三に、私が以前から訪れていた孤児院のために 10 万円を使うということでした。

<実施報告>

林 浩之（慶應義塾大学 商学部）

『金融市場の規制状況調査と外資系企業の進出によるベトナム経済の発展の可能性』

「ベトナムに進出している外資系・ベトナム国内企業へのインタビュー」

ベトナム・アドバンス・コンサルティング

コンサルティングの視点で語ってくれました。ベトナムは全体として要職にベトナム人が着いているため中国人（華僑）が活躍しづらい。会計の面から見ても世界水準に迫いついてきている。中国などと比べて反日感情が少なく日本企業によるM&Aの際も抵抗がない。またハノイは政都でホーチミンが商都として機能しているため人口、消費がこれからも増大していき、ホーチミンがアジアでも大きな地位を占める都市となるだろうと予想している。

サイゴン証券

日本留学経験のあるHAI様にベトナム経済を語っていただきました。ベトナムはやはりまだ会計士の数や監査も一部を除き信頼できる内容ではない模様。しかし現在、法律、など証券市場を整備していてホーチミンとハノイに証券取引所が存在している。もちろん上場基準などは日本と比べて低い。また年内に開始できるようにオンライントレードのシステム開発に従事している模様。金利が高いのが少々問題だが（企業向けの貸し出しが年利14%）それでも年率8%（今年は6%を目安としている。）のGDP成長率をつづけているベトナムは魅力ある投資先だと。

伊藤忠商事

ベトナムは投資環境が整備されていなかったため海外直接投資の額が少なかったが、近年急速に整い始めてきたため投資が増加してきた。しかし近年ではベトナム政府が輸出品にかかる税金を増やしたため工場建設のメリットが薄れてきている。さらにベトナムには技術が根付いておらず外資系の企業が撤退したら一次産品に頼るしかなくリスクがある。また原油なども産出しても輸出して、精製して輸入という形をとっている。しかし最近では各産業における精製設備の増強、技術の伝達の流れができており、製油所を作る計画も進行中である。

今回の旅行ではいろいろな企業を訪問させていただきました。いずれもそれぞれ独自の視点からベトナムの経済、現地で取っている経営戦略、現地で経営を行うに当たって発生する問題点などを明確に語っていただきとてもためになるインタビューになりました。また現地調査には自分の大学の友人である根来を同行させインタビューの際のアシスタントをしてもらうことになり、とても効率よく行うことに成功しました。現地の商業都市ホーチミンでは到着後は企業訪問はもちろんのこと、現地で知り合った日本人たちとメコン川を下り、現地民の生活や食生活をのぞいてきました。さらにクチトンネルといったベトナム兵が抗戦するときに使った地下道などを見学させてもらいました。またホーチミンの後に訪れた首都ハノイではハロン湾などの世界遺産を眺める、日本にはないベトナムの自然に圧倒され感銘を受けずにはいられなかったです。ハノイはホーチミンと比べ街並みが統一されてなく、日本の田舎の商店街のような感じで、一昔前のベトナムを想像させる都市でした。

※ 「ベトナムに進出している外資系・ベトナム国内企業へのインタビュー」6社の中から3社を抜粋。

上野 俊行（東京大学 大学院 総合文化研究科）
『障害を持って生きるということ』

<3日目> 午前中、Thao さんの紹介により、Binh Tan 区にある障害者施設 Mai Am を訪問。ここは外国人によるキリスト教教会の慈善施設で、身寄りのない障害者が集まって生活するところである。作業所での作業や、絵を描いたりして暮らしている。

代表して私に説明してくれた Phan Sinh さんは、交通事故による脊髄損傷で、入院していた病院でのつてで



こちらの施設に入所することができたそうである。しかし、まだまだ障害者に対する公的なフォローは確立されておらず、篤志家に頼る部分が多いようである。私のリハビリの体験の話をすると、リハビリに対する概念が違うようで、医療費、通院の交通費の負担が大きいので通院も難しいという話をしてくれた。リハビリは、日常生活訓練であるため、入院して受けるものであるという日本的な概念との根底からの相違であった。



Pham Sinh さん



入所者の方々

午後は 3 区にある Thao さんが教える英語教室へ。ベトナムの将来を担う若い人々と直接交流を持ちたいという私の希望を聞き、「英語教室だから、英語で説明すること」を条件に、Thao さんの初級クラスの授業時間を私に提供してくれた。午後 7 時半からのクラスであるが、生徒は、中学生の男子達と 20 代前半の女性達が中心の計 10 名。私が用意した自己紹介の写真を食い入るように見ながら、興味津々に話を聞いてくれた。車椅子でバスに乗り込む様子を見て、「ベトナムでは健常者でもバスに乗るのが難しいのに、車椅子の人がバスに乗れる余裕があるわけがない」という意見が出たが、既にホーチミン市にも車椅子専用バスが存在することを話すと、皆知らなかったようでびっくりしていた。私自身の北京での経験をもとに、「かつては並ぶことをしなかった中国の人たちもオリンピックの影響で、列を作るようになり、車椅子でもバスに不安なく乗ることができるようになったのだから、ベトナムもいつかはそうに変わるだろう」と話すと、「そうなのといいね」と答えてくれた。授業の後、近くの che 屋さんでおしゃべり。皆、とても元気でフレンドリーな生徒たちであった。



紙芝居係の Thao 先生



※体験旅行期間 3/11～3/21 の 3 日目の報告を抜粋。

玉田 智子 (広島大学 医学部)

『私の 30 万円の使い道—ベトナムの子供たちのために未来へつづく支援を—』

今回の渡航目的は大きく 3 つありました。

第一に、ベトナムの枯葉剤被害と補償制度について調べる。第二に、ベトナム人医師の方々と農村部での健康診断に参加すること。第三に、私が以前から訪れていた孤児院のために 10 万円を使うということでした。

以下に私の渡航について紹介させていただきます。

3/3 (火) 枯葉剤被害の研究・治療のための政府の機関として機能していた 10-80 委員会、Peace Village を訪問



10-80 委員会は 1980 年 10 月に発足しました。その役割は①ダイオキシンの影響を調査すること、②枯葉剤被害者の治療です。10-80 委員会の建物には Thanh Xuan Peace village が併設されています。

現在までに 3000 人以上がこの施設を利用し、現在は 136 人が入所しています。この平和村では主に枯葉剤の影響で障害を持った子供たちが、その障害の程度に応じて、リハビリや勉強、コンピューター、刺繍などの技術を学んでいます。私が行った時には経済大学の学生達がボランティアとして訪れていて、先生のアシストをしていました。

第一世代の影響として多いのは倦怠感、精神症状、第二世代の影響として多いのは神経系の影響(通常の 2~4 倍の確率)だそうです。

現在困っていることは設備が足りず、研究ができないことだそうです。日越医療交流センターが贈ったものは古くなってしまい、人の血中のダイオキシン濃度などは測れなくなっていました。1 年に 1 回神奈川大学の人に来て、北と南のダイオキシンの影響の違い等について一緒に研究しているそうです。

しかし 10-80 委員会は 2000 年頃から、正式には 2005 年に活動を縮小しており、平和村などの管轄を地域の保健省に移行しています。

その背景には、アメリカとの関係を重視するために、枯葉剤の影響を追及しないというベトナム政府側の政策変更があります。

そのため、Binh Duong の施設のように、枯葉剤の研究もひとつの目的であるはずの施設で、研究が行われていない、平和村どうしの連携がなくなっているといった状況が起こっているのではないかと考えられます。

3/4 (水) ハノイ赤十字社訪問、障害者のための職業訓練施設訪問

(枯葉剤被害補償制度についてお話を伺いました。)

1998 年 6 月に設立。62 の省に支部を持ち、その下にも県や個人レベルの基金もできています。赤十字の目的は①広報活動、②被害者に対する支援対策、③被害者に対する社会補償について政府に提案、④ニーズに応じて枯葉剤の研究、原因と社会調査を行うことです。

赤十字の支援は①治療(整形手術)、②生活支援—本人に対しては職業訓練、奨学金、保健事業などがあります。世帯に対しては畜産、家族への職業訓練、家の改築などがあります。

赤十字が必要としている支援についてお伺いしました。

① 現在在宅のリハビリに注目しており、ボランティアや家族の人々に指導して、リハビリをするようにしているが、設備、制度が不十分である。そのため、日本などから技術援助などが必要。

② 職業訓練所で作ったものを製品として売るために設備・制度の費用として 1 万ドルが必要。



※体験旅行期間 2/22~3/8 の 10、11 日目の報告を抜粋。